

# 松原歴史ウォーク

Vol.179

## 岡の真宗大谷派・円正寺

西田孝司



円正寺(岡5丁目) 左上は『本尊録』(円正寺蔵)。「小土山円正寺住物也」とある。右上は円正寺墓(堺市美原区大保の浄土寺墓地)。「円正寺墓」の下の中台に「寺子中」、中台向かって右面に「文政五年壬午五月日建之」、左面に「松原村岡 信道山」とある。

### 三河・源徳寺、正善の入寺 小土山から信道山へ変更

岡五丁目の中高野街道を西に入つた北筋に、東本願寺を本山とする真宗大谷派の信道山円正寺(歴史ウォーク155)が建っています。もともとは、現羽曳野市南恵我之荘にまたがる立部や西大塚地区の小土墓地東側に創建されていました。

奈良時代、行基作の本尊を祀つたという伝承を持ち、小土山向福寺とよばれました。寺推定地からは、室町時代、十五世紀から江戸時代前半の遺構や遺物が見つかっています。

延宝五年(一六七七)十月七日に調べられた円正寺の『本尊録』によると、火

災に遭つた同寺を江戸時代前半の寛永年間(一六二四〜四三)に、住職の正善が現在地の松原村岡に移して再建し、小土山の山号はそのままだ円正寺と号したと伝えていきます。

岡には、この頃、同じ真宗大谷派の泉福寺(歴史ウォーク178)が竹内街道(茶屋筋)よりの中筋に建っていましたので、浄土真宗寺院が近接するようになったのです。火災は、慶長二十年(一六二五)の徳川方と豊臣方との大阪夏の陣によって戦場となったからでしょう。現在、円正寺本堂に祀られている本尊の阿弥陀如来立像には焼けの痕跡が見られますが、これはこの時の被害によるかもしれません。

本山から末寺に免許下付された記録帳である『申物帳』に、のち、円正寺に寛文二年(一六六二)二月二日、東本願寺十三世宣如の絵像が下されたことが見られます。また、同三年六月十日に「御開山様」の親鸞聖人絵像が下され、同六年十二月十五日にも、聖徳太子などの「太子七高祖」が下されました。

その後も、円正寺は元禄五年(一六九二)十一月の松原村の『寺社帳』に「東本願寺堺御坊末寺」とあり、境内は東西六間、南北拾三間二尺でした。本堂や庫裏が藁葺で、庇だけが瓦葺であること、山門は瓦葺であることも記されています。

先の『本尊録』は、寺が小土山から岡に

移つた寛永年間に正善が中興初代住職となつた後、正月を経て、二代正善が延宝五年に調べたものを元禄五年十一月に、時の住職の清岸が写したものです。

特に、興味深いのは二代正善が三河(愛知県の吉良(現西尾市吉良町)にある同じ真宗大谷派の源徳寺の僧で、同寺から円正寺に入寺したことです。

山号にこだわりますが、『本尊録』が書かれた延宝や元禄期の十七世紀末には、また、小土山の山号でした。しかし、天明八年(一七八八)の過去帳には「信道山円正寺所持」とあり、十八世紀後半に、今の信道山の山号に変わっています。実は、信道山こそ正善の前住寺院である源徳寺の山号でした。

余談ですが、源徳寺は「忠臣蔵」で知られる吉良上野介の領地でした。また、幕末の慶応二年(一八六六)に伊勢神戸(三重県の荒神山の血闘で亡くなった)任侠の吉良仁吉の墓があることでも有名です。仁吉墓は、清水次郎長が仁吉の一周忌に菩提寺の源徳寺に建てたものです。

なお、円正寺の寺子さんたちは、文政五年(一八二二)五月、円正寺歴代住職の墓を岡の共同墓地である浄土寺墓地(堺市美原区)に建てました。「円正寺墓 寺子中」とあります。檀那寺への絆を深める墓石といえるでしょう。